

おうむの遠藤さん

外国語学部
国際文化交流学科 4年

片岡 翼

十才の時だった。

その日、家に帰ると、お母さんはいなかった。

窓の手前のところに並んでいた香水が、一つも残らずなくなっていたし、タンスを開けると、お母

さんのお気に入りの洋服は一つもなくなっていた。

お母さんが残していったものといったら、遠藤さんだけだった。

遠藤さんはあたしに遠慮をする様子は一切なく、

「栄子、出てったよ」と言った。

遠藤さんは、オウムである。

あたしの九才の誕生日に、お母さんが買ってきた。

鍵っ子だったあたしが寂しくないように、お母さんが買ってきた。

真っ赤な羽で、くちばしは真っ黄っ黄で、だけど

目は真っ黒だった。

あたしは遠藤さんに夢中になった。

まるで妹か弟ができたかのように、かわいがった。

手を噛まれても、涙は出たけど怒りはしなかった。

遠藤さんはものすごい早さで、人間の言葉を覚えていった。

あたしたちの名前と、ひと通りの挨拶は、すぐに話せるようになった。

「コンニチワ」「アリガトウ」「コンバンワ」「イタダキマス」とか、あと色々。

なかでも、「イージャン、イージャン」というのが、

遠藤さんは特に好きなようだった。

お母さんに「セーラームーンのふでばこを買ってほしい」と頼んでいると、後ろから遠藤さんが「イージャン」と言ってくれたし、お父さんに「今日はハンバーグがいいなあ」と頼むと、「イージャン」と言ってくれた。

遠藤さんはいつもあたしの味方だった。

そう、遠藤さんっていうのは、遠藤さんが最初に話した言葉が「エンドーサン」だったから。

たぶんNHKのドキュメンタリー番組だったと思う。

本物の遠藤さんは八十くらいのおじいさんなんだけど、自分の家の横でたくさん育てた桜の木を、全国の小学校を回って植えている、とてもすてきなおじいさんだった。こどもたちに囲まれて「遠藤さん!」「遠藤さん!」と慕われている姿を見て、「エンドーサン!」としゃべったのが、初めてだった。

家族のだれかが帰ってくると、「オカエリ!」と遠藤さんはしゃべった。

そして数ヶ月後には、あたしが帰ると「オカエリ!」「お母さんが帰ると「オツカレサマ!」、お父さんが帰ると「オツカレ!」と、区別してしゃべるまでになっていた。

お母さんに丁寧なのは、お母さんが遠藤さんを買ってきてくれたからだと思う。

十才の誕生日は、運悪く二人の仕事が両方長引い

て、あたし、一人で過ごすことになった。

あたしはいつものように寂しさをまぎらわすために、遠藤さんに話しかけていた。

そしたら遠藤さん、「たんじょうびなのにな」って、しゃべりだした。

あたしはおどろいた。誕生日を知っていることをじゃない。それは、いつものしゃべりとは、とても大きな違いがあったから。

「タンジヨウビナノニナ」じゃない。「たんじょうびなのにな」

ひらかなだ。と思った。

「トキヒコもエーコも、ふざけてるよなあ。まちなをひとりにしてさ」

こんどは、小さい「あ」が入ってる！と思った。

それからしばらく二人で話しをした。

「遠藤さんは、男なの？女なの？」ときくと、「オンナだよ。シツレイなやつだね」と答えた。

「でも口調が男っぽいね」と言うと、「オトコっぽさとはなんだい」と聞き返してきた。

答えられないでいると、「そんなもんニンゲンがかってにきめたことでしょう！」と羽をばたつかせた。

お父さんが帰ってきた。

あたし、お父さんに飛びついた。「え、え、遠藤さんが、しゃべったんだよ!!」

お父さんはべつだん驚いた様子もなく、「前からしゃべるだろう」と答えた。

「ちがうの！ひらかななの！」あたしは訴えたけど、意味は通じていなかった。

お父さん、疑問に思いながらも、遠藤さんに、「ただいま」と言ってみた。

そしたら「オツカレー！」と、遠藤さん。

「あ！カタカナだ！」とあたし、焦る。「ちがうの！こんなふうじゃないの！」

あたしは大声をあげたけど、「そんなことより、遅れてごめんなあ」と、お父さんは言った。そのあと、お母さんが帰ってきてても、遠藤さんはやっぱりカタカナしかしゃべらなかつた。

遠藤さんはひらかなを、どうやらあたしにしか使わないようだった。

そのころには、お母さんの帰りはいつも遅くて、遠藤さんの面倒を見るのは、ほとんど全部、あたしの仕事になっていた。

だから、あたしだけ特別なんだらうって、そう思った。

遠藤さんはあたしに、いろんなことを教えてくれた。

「最初に空を飛んだ鳥の話」とか、「ハリセンボン

とハリネズミがケンカした話」とか。

「アリ不足になった時のアリの話」なんて、大笑いしちゃった。

「アリのクイはなんでアリが大好きなの？」と聞くと、「そりゃアリのクイってなまえだからさ」だって。

あたし、楽しくて毎日学校終わると走って帰った。

そんなだから「たまにはそとであそんでこいよ」ともだちはいいぞー」と遠藤さん、そんなことをよく言った。

だけどあたしの友達は、遠藤さんで十分だった。ドラえもんってゆう最高に楽しい友達がいるのに、外に出てジャイアンやスネオやしずちゃんや遊ぶのび太は、やっぱりアニメだなあ。リアルじゃないなあ。なんて思った。

そんな毎日だったから、あたし、お父さんとお母さんがうまくいってないなんて、気づきもしなかつた。

お母さんに愛されていないなんて、思ってもなかつた。

だってお母さんがいると、遠藤さんはカタカナしかしゃべってくれないんだもん。

ごくたまに、家に帰るとお母さんが先に帰ってきてることがあって、そんなとき、あたしきつと、つまらなそうな顔をしてたんだと思う。

だから、お母さんがいなくなっても、そんなに寂しくはなかった。

遠藤さんは、「栄子のことは忘れなよ」って言ったし、お母さんを恨んだりもしなかった。

そう、その頃には、遠藤さんはひらかなどころか、漢字までしゃべるようになっていた。

そうして三ヶ月くらいたって、あたしの十一才の誕生日、

お父さんが、女の人をつれて帰ってきた。

「とても仲良くしてるひとだよ」とお父さんは言った。

すごく綺麗なひとだった。

「こんばんは」の「は」が「わ」じゃなくて「は」に聞こえるくらい、透き通った声で、そのひとは挨拶をした。

「はすみです」と言った。やっぱり、「は」の発音が綺麗だった。

お父さんは、はすみさんを居間に通すと、買ってきた食材で料理を始めた。

はすみさんは、「まあ、すてきな鳥」と遠藤さんに駆け寄った。

「エンドウデス。エンドウデス」

上手に挨拶する遠藤さんにおどろいていた様子だ

が、遠藤という名前には特に疑問をもたないようだった。

不思議と、はすみさんからは嫌なかんじがしなかった。

お母さんがいなくなつて、たったの三ヶ月でお父さんが連れてきた女の人に、嫌なかんじを感じていない自分に、ちょっとおどろいた。

だから、「お母さんが買ってきたの」なんていうセリフも、ふつうに出てしまった。

はすみさんは、「そうなの」とつぶやいて、食卓に座った。

お父さんのパスタはいつもより美味しかった。

「アンチョビが効き過ぎたな」なんて言うけれど、アンチョビなんか、いつも使わないのに、少し無理をしている感じのお父さんが、かわいかった。

それからいくつか、あたしの話をしたり、はすみさんの話をしたり。

アンチョビを食べ終わると、お父さんはケーキを出してきた。

「うわ！ショートケーキだ！うまそー」遠藤さんはひらかなでつぶやいたけど、その声はやっぱりあたしにしか届いていないようだった。

お父さんがいるときには、遠藤さんは一方的に話かけてくる。あたしは、目で返事をする。

ふたりがハッピーバースデーの歌をうたってくれた。

あたしはろうそくを一息で消すことができなかつたけれど、満足だった。

はすみさんは、プレゼントをくれた。

「ふたりで選んだんだ」と、お父さん。

「なんだろう」ってあたし、ドキドキしながら包みをあけたら、ぬいぐるみだった。

アクリイの。「あ！いいなあアクリイ」遠藤さんは後ろでしゃべっている。

もちろん、遠藤さんのひらかなの言葉は、二人には聞こえていない。

「なんでアクリイ？」って聞いたら、「アクリイってかわいいでしょ。ほら、この長い鼻とか」って

はすみさん。

ぎゅつと抱きしめると、ほのかにいい匂いがした。遠藤さんは「ぬいぐるみいいなあ。欲しいなあ」と言っている。

「アクリイってなんでアクリイが大好きか知ってる？」とあたしはクイズをだした。

二人はいろいろと考えていたけど、結局正解は出

なかった。

遠藤さんは後ろで、「全然だめ」「ばっかだなあ」とか言っている。

あたし、笑いをこらえるのに必死だった。

正解を言うと、二人は「なるほど」と笑った。

お父さんのこんな幸せそうな顔は、始めて見たかもしれない。

だからあたし、「ふたりは、つきあってるの？」って聞いた。

そしたら、ふたりとも黙りこんじゃった。

だからあたし、話題を変えようとした。「もう一問クイズだそっか」って。

そしたら遠藤さんが言うの。

「まちな、聞こうよ」って。

あたし、思わず「うん」って口にだしちゃった。

遠藤さん、「はすみさんは、お父さんのことどう思ってるの？」だって。

あたし、遠藤さんの言うとおりに聞いてみた。

そしたらはすみさん、「うーん、むずかしいクイズだね」って笑った。

そうだ、クイズだそっかって言ったんだった。

「お父さんは答える権利あるの？」ってはすみさん。

「答えられるものならね」と、遠藤さん。あたしも同じ風に言った。

お父さんは「ほんとに難しいなあ・・・」と苦笑い。はすみさんはしばらく黙ったあとに、「すき、なんだとおもう」って答えた。

遠藤さん「好きって、愛してるってこと？」

あたし、それからはせんぶ、遠藤さんの言葉どおりにしゃべってみた。

「好きって、愛してるってこと？」

「うん。愛してるってことかな」はすみさんは言った。

「正解！」と遠藤さん。あたしも、「正解。」

ビックリマークは控えめにしておいた。

はすみさんは、「やったあ」って、その日いちばんの笑顔になった。

「じゃあ第二問。お父さんは、どうでしょう」と、

また遠藤さん。

お父さんは、はすみさんよりも時間がかかった。

「降参？」と遠藤さんがしびれをきらしたので、「降参？」と聞いてみる。

そしたらお父さん、「好きなんじゃ、ないかな」

「好きってー」あたしそう言いかけると、お父さん、「愛してる、の好き、ね」

「正解！」

遠藤さん、そう言ったけど、あたし、黙りこんじゃった。

うん。やっぱり、お母さんが出て行ったのは、はすみさんのせいなんじゃないかなって思ったから。それでも、なんか静かになっちゃったから。「正解」って言った。

でも遠藤さん、そんなあたしに気づいてるはずなのに、引かないんだ。

「お父さん、いつから愛してるの？」

あたし、それはなかなか聞けなかった。聞くのが怖かった。

それでも遠藤さんしつこいから、あたしも聞いてみた。

そしたらお父さん、しばらくして、「三ヶ月くらい前かな」って。

三ヶ月くらい前って、ちょうどお母さんがいなくなった時。

あたし、お父さんをちよつと、にらんじゃった。

でも遠藤さん、「怒らないであげて」って、そんなこと言う。

「あたしはね、もっと、ずっと前から、お父さんのこと、好きだったの」って、はすみさん。

「ごめんな。でも、浮気とか、そういうことはしてないからな」って、お父さん。

「本当？」って聞くと、お父さんは「本当だ！誓ってもいい」って、真剣な表情。

でもあたし、いまの質問は、遠藤さんにしたの。

だからもう一度、「本当？」って遠藤さんに向かって聞いてみる。

そしたら「本当よ。あたしが勝手に思っていただけなの」って、こんどははすみさん。

遠藤さんは、そのあとに「本当だね」ってつぶやいた。

「お母さんは、浮気とかしてたの？」って遠藤さん。

あたしも同じに言う。

お父さんは何も答えなかった。

「答えないってことは、そうなんでしょ？」

あたし、そう聞いちゃった。

これはあたしだけの言葉。

遠藤さんは「ねえ、まちね」と言った。

「まちね、大丈夫だよ」

少しの間静かになってその後に、

お父さんが「なあ、まちね。はすみさん、新しい

お母さんになって、いいかな」って言った。

その後に、はすみさん、「あたしね、まちねちゃんのお母さんに、なれるかわかんないけど、がんばって、いいかな」って言った。

遠藤さんを見ると、遠藤さんは、なんにもしゃべらずにこつちを見ていた。

あたし、遠藤さんに聞いた。

「遠藤さん、どうおもう？」

ふたりも、遠藤さんを見た。

そしたら遠藤さん、なんて答えたと思う？

「イージャン。イージャン」

ふたりは、くすくす、と笑った。

けれどあたしには笑えない。

遠藤さんの答えはカタカナだったから。

「遠藤さん？」

あたし、もう一回聞いたけど、

「イージャン。イージャン」

「遠藤さん、どうしたの!？」

あたし、思わず叫んじやった。

「答えてよ!!」

それでも、

「イージャン。イージャン」

遠藤さんはそれしか言わなかった。

それからずっと、遠藤さんのひらかなは聞いていない。

だけど、あたしは、前よりも、ずっとずっと、遠藤さんのことが好き。

おしまい